



●ドイツ色彩学界の一動向

来る7月4、5日、ドレスデン工科大学建築学部附属色彩論研究所において、「ドレスデン色彩フォーラム (Dresdner Farbenforum)」年次大会が開催されます。

第15回のテーマは「画家が知っていること：絵画における色彩の知識」です。

1日目は「歴史、理論、美学」において芸術と科学の知の共有可能性が検討され、「芸術と手工における色彩論」では、ルネサンスから19世紀にわたる実例が発表されます。

2日目の「修復における色彩の知識」では現代の修復の実情が共有され、「実践と理論」では色彩現象をモチーフとする芸術実践が紹介されます。

来年2月の第38回ドイツ美術史学会のテーマも、奇しくも「知 (wissen)」です。

美術制作・受容に関わる知の伝達方法やデジタル化といった実際的な問題から、アカデミーや大学、言説、科学、一般社会との作用史まで幅広く議論されます。

美術史の研究手法の変化のただ中にあることが実感されます。前者については筆者も参加が決定しておりますので、7月の通信にてご報告いたします。(主査：山根千明)

●ポーラ美術館 COLORS 展から -2

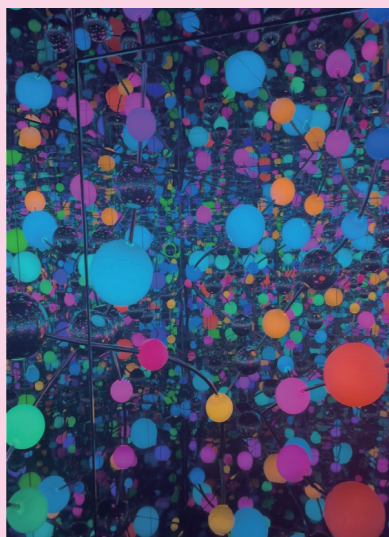
草間弥生が手がける「無限の色彩」は、色と水玉のパターンが特徴で鏡張りの部屋に扉を閉めて1人でその空間を30秒間体験し、その多彩な色彩はまるで万華鏡の中を飛び込んだように、複雑で神秘的な空間でした。

光の足算の加法混色のRGBで色を作り出されている中で、赤は情熱とエネルギー、緑は安らぎと自然、青は穏やかさを表現し、絶妙なバランスが彼女の世界観を表現していると感じました。

そのRGBの3原色を無限に使いこなし、それぞれの色が組み合わさる事と、ミラーの反射を使いこなし、色と色のマジックが生まれまるでXYZ表色系の色空間の中にいるようにさえ思えました。

彼女のアートは私達の心に響き、観る人により様々な感情が生まれると思いました。

(幹事：田森恭子)



●日本の伝統的な色名・桃色

「万葉集巻十九」に、

春の苑 紅にほふ 桃の花

下照る道に 出で立つ少女

という和歌が掲載されている。また、「日本書紀」に「桃染布」。「衣服令」に「桃染のひとえきぬ」などの記述が見られる。

古代色名では、桃を「つき」と読んでおり、また、桃花褐と書き「あらぞめ」とも読んでいた。

襲の色目では、表は紅で裏は紅梅、また、表は白で、裏は紅梅、表濃紅裏紅梅など諸説がある。

「桃色」の名の染色は、江戸時代には行われていた。現代ではピンクという色名が主流となっている。

桃は、中国を原産地としたバラ科の落葉小高木である。

桃は、4月ごろに淡紅色の他に、白や濃い紅色の五弁花を咲かせ、端午の節句の花として使われ、実は果物として食用になり、種子は桃仁といい漢方薬の原料になる。

「桃栗三年柿八年」と芽生えの時から、桃は三年で実を結ぶという。

桃色珊瑚。桃色インコ、桃色遊戯などの使われ方がある。

(永田泰弘)